

家事とその価値

五年 M・T

人類が誕生してから今日まで欠かさず行っていた営み、それは食事。食事と聞いて皆さんはどんなことを想像しますか。お皿の上に載ったおいしそうな料理でしょうか。それともお腹が満たされ幸福感の中にいる自分や家族、友人でしょうか。ファーストフードやコンビニ弁当により個人で食事をとることも当たり前となってしまった今、私たちが考える食事の姿は本来の姿だと言えるのでしょうか。私は先日、とある小さな映画館で母と映画を見ました。その映画は「食」という人の営みの原点を思い出させてくれる素敵な映画でした。今回の感話ではその映画を見て感じたこと、考えたことを書いていこうと思います。この映画は六十五分というショートトリップドキュメンタリーで、ナレーションは一切ありません。しかし、スクリーンに映し出される一日は私の想像をはるかに超えるととても興味深いものでした。映画の舞台はインドのシク教総本山にあたる黄金寺院。ここでは毎日十万食が巡礼者や旅行者のために、すべて無料で提供されています。そこはシク教の「宗教、カースト、肌の色、信条、年齢、性別、社会的地位に関係なく、すべての人々は平等である」という教義を守るため、皆が平等にお腹を満たすことができる聖なる場所なのです。十六世紀に建てられ、いかなる権威にも束縛されていない黄金寺院のキッチンには、極めてシンプルに「共に生き、尊敬し合う」という基本原理を貫いています。五〇〇年以上もの長い年月を越えて受け継がれてきた知恵や教え、何千人もの人々が食卓を共にする光景、一切無駄のない神々しいキッチンの舞台裏は私にたくさんの気づきを与えてくれました。

最も印象的だったのはキッチンの舞台裏です。ここに登場するのはただ水と火とフライパンと大地から採れる食材、それを調理する男女だけです。そして驚いたことは、黄金寺院の巨大食堂を支える彼らはすべてボランティアであるということです。彼らの仕事は食材の収穫、食事の下ごしらえや調理、食事の給仕から食器を洗って拭き、食空間を掃除することまで、これを十万食分こなすのです。彼らは朝から晩まで働きます。これだけで一日が終わっていくのです。私は人間の生活は本来こういうものなのかと驚きを隠せませんでした。つまり、黄金寺院では、生活というものがごく単純なものであるのです。原始的で整然とした黄金寺院の食卓は、あらゆる差別や偏見を気にせず同じ鍋のご飯

をいただく十万人の人々とそれを支える人々の無償の労働により成り立っているのです。彼らの姿から「食べること」というのはお互いに与え合うという人間の基本原理だと感じました。

黄金寺院での食卓が成り立っているのは野菜を栽培している人たち、料理をつくっている人たち、食事の給仕をしている人たち、そこに関わるすべての人の無償の労働によるものです。私たちはよく、食べ物に感謝して食事をしなさいと言われますが、私は食べ物を提供してくれるすべての人の命に感謝すべきだと思いました。彼らがいなければ、私という命も成り立たないのです。しかし、私たちの食事はどうでしょうか。私たちの多くは、食べ物にお金を介在させることで食事をしています。では、私たちは何のために食べ物にお金を払っているのでしょうか。食べ物に値段がついているのが当たり前になっている私たちは、食材をつくる人、食事を提供する人の存在を忘れがちです。私たちは一つの食材、一つの料理に関わるすべての人々の労働、時間を買っているのです。その人たちの時間を買うということは、その人たちの人生の一部を買っているのと等しいことになるのではないのでしょうか。

「食事をする」ということ、それは人間が生きる上で欠かすことのできないすばらしい習慣だと思います。その一方で、私たちは忙しさを理由に食事をおろそかにしがちなのも事実です。例えば、私自身、朝食など忙しい時間帯での食事を見直してみると、十分な時間を取れずきちんと食事と向き合えていません。私は黄金寺院の一切無駄のない日常を見て、食事という行いをおろそかにしがちな現代社会は逆に貧しいのではないかと感じました。「食」は人間の営みなのです。「みんなで作って、みんなで食べる」という一見古そうに見えて、今の私たちに食の本来の姿を見せてくれるこの黄金寺院の食卓のかたちを、私は忘れずに食事をしていきたいと思いました。

このように食事の姿を見直してみると、食事の用意に限らず更には掃除や洗濯、ゴミの処理など私たちが日常生活の中に見出す家事の価値というものが低くなっているように思います。家事においては男女を問わず一人一人がその価値を見直す必要があるのではないのでしょうか。現在、日本では共働きの家庭が増えています。私の家庭も共働きです。主に家事をしている母です。黄金寺院の食卓を見てわかるように食事を提供するためには様々な過程があり、時間がかかります。限られた一日の時間の中で仕事も家事もこなす母は母の時間、つまり人生の一部を家族のために費やしてくれているのだと思います。私は黄金

寺院の食卓の裏で、巨大な鍋の中に入って一心不乱にその鍋を洗っている人の姿を見て、家事には人の為に自分を活かすことができるという十分な価値があるのだと気づかされました。また、黄金寺院の食卓を支える人々がボランティアであったように家事は主体的な行いであるのだと思います。相手のことを考え、自然と行動して初めて家事に尊い価値が生まれるのだと再認識することができました。

私は忙しいから、面倒だからと言って、いつも食事の用意、家事の手伝いを避けています。でもそれは、誰かがその面倒なことに時間を割いてくれるから成り立っていることなのだと思います。今は、親など自分の生活を支えてくれている人たちに甘えている部分がほとんどですが、私も自分の人生という時間を他人のために使える人間になりたいと思います。仕事や勉強、学校優先の現代社会ではありますが、食事や家事などをおろそかにせず、丁寧な暮らしをすることが本来の人間としての豊さであるのではないのでしょうか。